

書く楽しさを実感する書写学習(三年)

新しい指導を考える会

1 実践の趣旨

今回の実践は、これまで培った書写の基本的な技能を活用して、毛筆で色紙作品をつくるものである。光村図書『書写教科書二・三年(p36)』に提示されている学習を参考にしながら、実践を試みた。

今回の実践では、味わってほしい三つの楽しみがある。一つ目は、言葉や文字を選ぶ楽しみ。二つ目は、自分で選んだ文字や言葉を書く楽しみ。三つ目は、書き終えた作品に落款を押して眺める楽しみである。

生徒が書写で書く文字や言葉は、多くの場合、教科書に見本があるものや教師の指示したものである。確かに、見本を見ながら書写の基礎的な技能を学ぶことは、有効で必要な学習方法である。しかし、生徒への意欲づけを考えたとき、「どのように書くか」だけでなく、「何を書くか」ということも大事な要素である。

そこで、まず、書く文字や言葉を生徒が自分で選ぶことから始める。人は言葉によって励まされたり、癒されたりする場合

がある。自分にとって意味のある文字、または言葉を書かせたい。新学期の始まりや卒業、そして文化祭といった節目には、生徒の内発的動機も高まる時期である。ここでは、文化祭での実践を紹介するが、四〜五月といった新学期にも使える実践だろうと考えている。

2 指導の流れ

第一時 課題の選定

図書室を使って課題の選定を行う。
次のようなものが参考資料となる。

- ・ 名言集・墨場辞典・漢和辞典・書体字典・詩集・国語資料集
- ・ 生徒手帳など

現在、歌詞やドラマの台詞、文学作品の中の言葉などを集めた新しい名言集も出版されているので参考にするとよい。また、漢字のみの課題を選ぶ生徒には、書体字典も関心を高める資料となる。

このような辞典類や名言集は普段あまり接することはないが、生徒にとっては新しい言葉と出会うチャンスである。課題を選ぶ姿は真剣そのものであった。また、事前に準備してくる生徒もいて関心は高かった。

第二〜三時 作品づくり

決まった課題に従って構成や書体を検討する。構成については、いくつかの基本形を紹介する。半紙を色紙大にして練習する。練習したものを、字形、文字の大きさ、線の太さ、運筆、構成などについて添削を行う。

清書用の色紙は、画仙のものを一人あたり三枚用意したが、もっと書きたい生徒は自分でさらに購入して書いていた。出来上がった作品には、○○書(または○○かく)と名前を入れ、印を押す。印は教師の方で「書」と篆刻したものを用意した。

時間があれば、各自が消しゴムで作るのもよい。朱の印には不思議な力があり、押したあとの完成した作品を見て、生徒の満足度が増す場合が多い。

第四時 コメント付き名札つけ

作品には、この課題を選んだ理由やこの作品に込めた思いなどを書いた名札をつけ、台紙に貼って展示した。

3 成果と課題

学習後の生徒の自己評価カードでは、八七%の生徒がこの学習に肯定的な評価をしている。

この学習を通して、手で文字を書くことの価値や楽しさに気付くとともに、自分を見直すきっかけになった生徒も少なくなかった。半紙ではなく、色紙に書いたことで、保存もしやすく、生徒の中に自分の作品を大切にしようという気持ちも育ってきている。

作品を見た保護者、地域の方からも好評であった。文化祭後、色紙額を購入し、家に飾ったという生徒も数名いた。中には、祖母に贈ったという生徒もいて喜ばれたという。また、校内でも生徒用玄関をはじめ、廊下の壁に作品を飾っている。下級生の中には、三年生の作品を見ながら、自分たちも三年生になったら、あんな作品をつくりたいと今からイメージを膨らませている生徒もいる。また、校内の潤いのある環境作りにも役立っている。



昨年度からこのような取り組みをしたところ、保護者もぜひ制作したいということで、今年度は、PTA教養部で講座を設けて取り組み、PTA作品として出品した。

書写の技能的側面だけでなく、国語の授業として、言葉選びから最後のコメントを書くという文字や言葉を探す活動を通して、語彙を増やし、生徒の思いや願いを表現する学習にもつながっていくことを期待している。

